

要点『日本文化原論 永続思想 主体性学』

哲学文化

1)未来性ビジョン：哲学文化観

1-1 情報発信と流通

マスコミにちょこちょこ出てきて、批判ばかりするような人々が現れる。露出を多用し知名度を広め知名度によって生存策とするような虫食いの破壊という精神性が映り負の秩序を広げる代表的な例示と浮かぶ。外界の利益等という発想は限りなく弱く一過的な煽り立てとやじ馬の墮落した無責任体質は酷く歪な精神不良を広げる。ゴミみたいな表現者に陥り自己を忘れ制御不能な視聴率至上主義の態度に陥り多額の金銭を荒稼ぎする事に終始するかの心象が起こる。歪な寡占構造や領域の負への対処が図られぬと悪性の目印となって歪な精神と外界を惑わす悪性源と作用する。

1-2 資源形成と保有と活用

これらをいいように操り自領域の成長を求めるスポンサーなど言う資源提供との相関が起こる。多くの資源をもって私的利益に偏った力と活用の暴走性を招くような現象について適正な管理基準と運用を図るインフラ性の機関が作用し人間の根源性の劣化を食い止める事が求められる。資源の保有と活用について健全な基準と運用の仕組みを確立し精神性に相応した身体性や観念性を図り長期的な性質の適正を遂げる。「流通、金融、広告、情報、人財」等の資源を直接的に動かす事業体において健全な思想や世界観の有無や程度を問い予めの基準の適正を伺い運用の質実を監査し検証と改善に回る持続的な仕組みにあって健全な生態系の循環性を遂げる。身体性に偏り精神性が不良である人間性や領域観が広がる事のなき基準の導出と稼働の仕組みを整え性質の劣化への対処と予防の施策を常設し哲学文化システム等という創造力と付加価値が作られる。

1-3 根本的理念

表現の自由が野放し的に広がる事に対し、健全な基準の導出と提示を要件として、立憲主義という理念と自由の均衡を果たし精神と身体と観念の健全な相関と習慣を有する個々人や事業体、各種領域観の形成と持続の理念と集約される。「権力や財力や知力」等々の各種資源と力の形成と活用の原理と精査し主体性一般の法則性を導出し広く万人的な基準尺度と浸透する空間性において負の循環性の強まらぬ生の循環と持続の生態を増す。生態の根源且つ根幹に関心が集まりこの面の良質に普遍的不変の観念が作られる。真に人間平等の理性の稼働する形を観念に表す働きに有用性が産まれる。

1-4 学術的な様式性の整備

学術科目と確立し社会の基礎土台の健全性を向上し現象の根源や上流からの適正をもって二次三次の生の循環と広がり空間全域の性格を作る。哲学文化面が土台性を持ち、教育金融や政治行政や産業経済という各面の同一基盤と働き社会性や自然観の性格を作り生態系の健全性と永続のビジョンと実現の実感が増す。土台性の良質が下落するほどに全域に渡る歪性という質の劣化を常識とした空間性と広がり慢性的なモラル破綻が増産される。このようなビジョンの導出と集約を図り空間の向かうべき方向感が形成され広く人々との同一性と共有され、良好な哲学文化を有する社会と生態を実現する。

1-5 生態観と健全と永続

人間性の根源や根幹及び全体性と習慣性の適正像を引き出し明瞭性や納得感の高まる概念と共有が広がり、長期性の利益と定まって中期や短期的因果や周期の性格付けや配置と制御性を生む。世襲の肥満者や物質依存性の激しい経営者等の悪性が大きな力を備えると負の連鎖に箍が掛からずモラル破綻の歪性が深まり広がる。この面に関心が集まり確かな主体性原理を構築する同一の関心と提起と合意と進み根本からの正常性と好循環の広がり持続を求める発想と創造性が作られる。

1-6 主体性や主導性の適正

生態を主導する等という発想を起こす対象にあっては、基礎土台性の見解を一丁目一番地の問いと答えに抑え見解を簡潔に整え明示する事が必要となる。個々の政策は根本的な性質が

反映され政策間の相関と体系の整合や成熟性になって良し悪しの観測と評価に回る。基礎土台性の見解が個々の政策と相関と体系に現れる。

1-7 根源且つ根幹と全体性及び習慣性

直接的に基礎土台性の見解や原理を纏め個別を表す前段性を示し基礎基準と応用の一貫性に及ぶ全体が産出される。虫食い的な混乱によるほどに部分性や羅列性の表現が示される。物質性に異様な依存と自存策を習慣とする精神性の心象が増す。基準の導出と明示の弱いまま批判と一方向の要望に終始する不健全性の予防と回る。悪性を取り扱う管理者責任へ視線が伸びる。歪んだ手法で自存性を求める悪性が広がらぬ確かな主体性像の見解を導出し良質が広がる生態ビジョンを構図の中心に配し長らく変わりづらい良性が存続する。

1-8 立憲主義と表現の自由

各種領域から多種多様な基準や領域観やビジョンが提起される。産業観、経済観、政治観、教育観、金融観、特定技術観、等々。哲学文化領域においては何処の領域にも共通する普遍的な観点を絞りビジョンと集約し提起する。主体性や領域化の原理を主要な関心として形が産まれる。

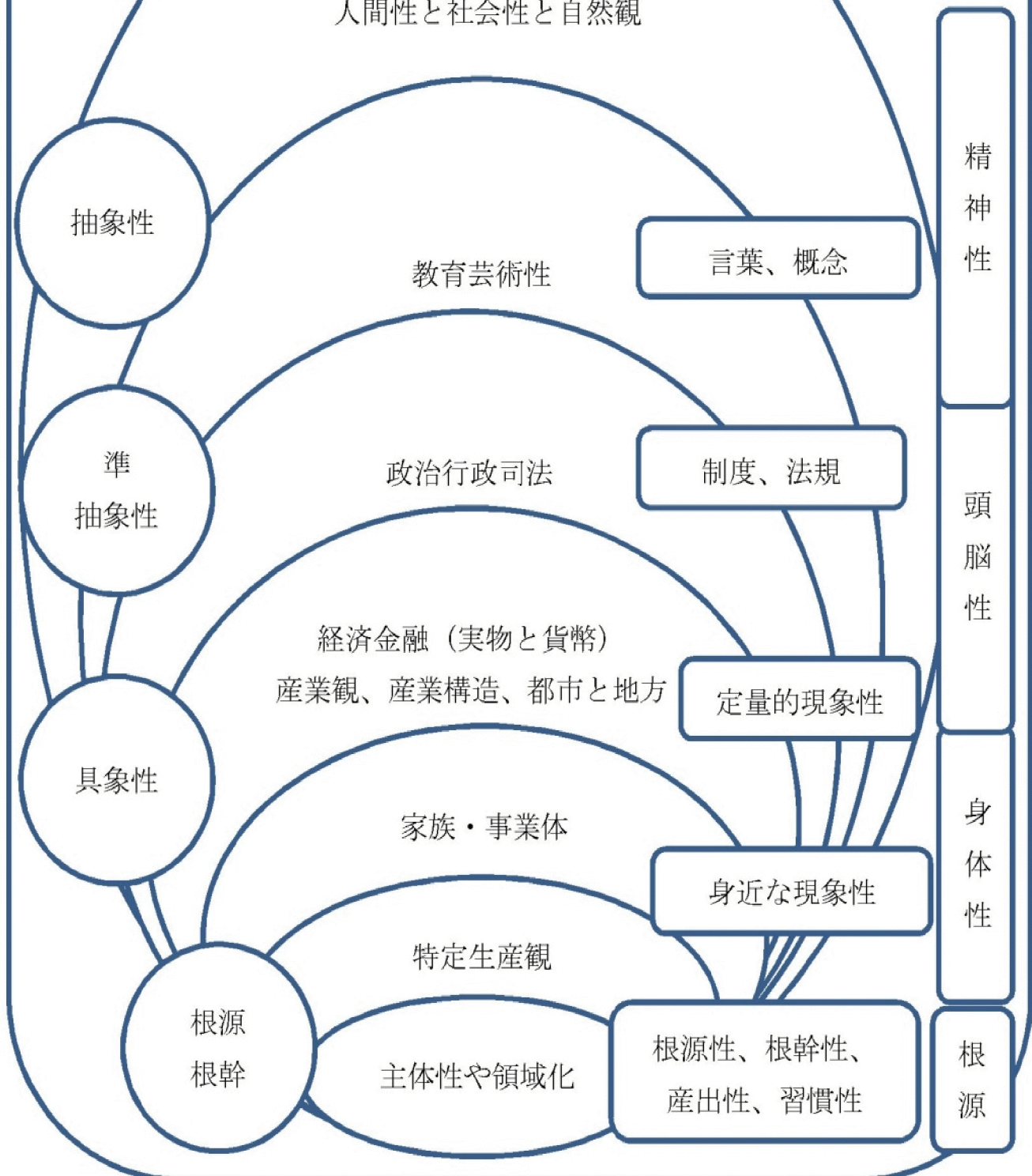
一定の領域観を形成し予めの尺度と備えそれを提示し個別現象の選定や観測と評価や予測、方法の導出と稼働に反映させる活動法則性において、立憲主義と表現の自由を兼ね備える表現と創造が出現する。混乱と暴走に陥らぬ健全な精神が稼働する。力と活用の適正の目安と働き平等の理性と成長の意欲と持続や永続の理念が作動する。「哲学、倫理、道徳」といった抽象概念の中味と精査し具象的な形を起こし頭と体と精神の有機的な習慣と稼働する健全な人間性と生態を実現する。大きな影響が想定されるほどに事前性を増す概念化と提示と合意を遂げる精神が出現する。

1-9 哲学文化観

哲学文化観は人間の内包性と外側の対象を想定し自己と外界を含む全体観を生む。主体性や領域化の原理を土台性に有しそれを外界に広げる内面と外形の整合と制御を求める精神と身体と観念の相関と持続を遂げる。

生態の健全性と永続性

人間性と社会性と自然観



1-10 広狭の哲学文化

1-10-1 世界観の中心

このような長期的に変わりづらい観念の形成と保有し根源且つ根幹と全体性の問いと探求を遂げると共に特定の生産や領域性を持って自己と外界を含む全体性と特定性の相関を掴み自存と他存の意識が現れ、生滅不可分と最良的生の導出という精神の出現と身体性や観念性を生む根源且つ根幹性を出現させる。根源と根幹と全体性には概ね同一基盤性を持って人間性や人間観、生態観の中核的な同一基盤性が整えられ特定性の形成と特定観の相互補完や相乗性に向けた建設的な発想と感性を出現させる創造基調が産み出される。概念の形成と導出を主要な関心と活動に備える狭義の哲学文化といった特定観が作られる。自己の主要な内包性を有し外側の構図を引き出し自他との良好な在り方を遂げる関係の算式が定まる。一方向の要望に偏らぬ相互性の構図を持ち真摯な内外との関係を作る精神が外界性になり、言葉や概念、領域観や思想世界観を生む。良い言葉や概念と伝わると共感性や肯定感が進み身体性や現象性に作用する因果が確認される。対象の選択や観測や評価や予測性に反映され具象的方法の考案と実施へ連なる直接間接の因果性が想定される。良い生の導出を持続する習慣性により健全な主体性や領域を実現する。狭義の哲学文化と広義の哲学文化観等という違いの認識と相互の相関性の認識に及んで、分化と統合の制御性に至る。「生態の健全と永続」といった抽象集約性の概念に対し各種の準抽象性や具象性の概念と整合を増し皮膚感覚の実感性や納得性や共感性が進み健全な内外との相関を遂げる。広狭の哲学文化観の形成と評価の尺度が備わり自己評価の基準と算定の客観性が進んで過大でも過少でもない評価性を高める制御と習慣の常態化をもって良好な精神の稼働する主体性や特定性を生む。精神や感性に一定の落ち着きと安定を有し良き自由や躍動を作る緊張と緩和の調和に及び長きに渡る生命の存続に連なる。物質依存性の激しい管理や支配の体質や欲求が増進し傲慢性と不健全性を招き精神不安と混乱の力と活用を増す事の無き主体性の適正と稼働の観念が世界観の中心に配される。

1-10-2 平等と成長と永続

男性や女性という生物物理的な観点と識別の前段として、「精神と身体と観念の相関と習慣」の観点を起こし人間性を浮かべ、適正を問い作る発想を出現させ、人間と自然と社会性と生態系の在り方へと創造性を出現させる精神性が稼働する。人間の不完全性を根源的な認識と有し、真理の探究を持続する精神性の存続において真に良好な生を求める力が産出される。物性的な力が蓄積され、それに依存する習慣性が高まるほどに、歪な精神や感性が増し、言葉や思考の習慣が減退し、身体性の欲求が強まり、二次三次の基準と分化の体系と無思想的な稼働に陥り、根源と根幹の不良に外れる傾向が掴み出される。身体性過多という歪性の認識と共に、観念性過多という弊害性の認識に及んで、各種の個性の長短性の認識へ回り完璧的な主体性や生態像を不動性にして、自存と他存の相互補完と相乗へと精神性が向けられる根源性と根幹性が出現する。枝葉の多産と部分性の偏りや全体観の萎縮性や全体性の広がりや具象性の喪失といった各種の歪性に対し、生態の良好な芯や基軸の集約的観点を抽出し歪性の広がる体形や領域観と稼働や習慣を招く事への適正な管理や自制と自律と制御の修復性を持つ規則性が内蔵される。樹木の生態に身近な生態を表す存在が映り「根源と根幹と産出(部分と全体)及び習慣性」の観点をとり上げ人間や生態の基本原理と起こし現象の観測と配置と評価と予測性や具象的方法の適正を作る原理と働く。誰にも平易に伝わる概念を用い自他との納得感や共感性を引き上げ良好な精神と感性を求める態度が進み人間平等の理性が現れる。「平等性と成長性と永続性」の理念と稼働の具象性を図る精神性が出現する。

2)創造の包括概念

軍事的な力の増強をもって、外界を従える発想の強い対象が出現する。

これへの直接的な対応策に同じような軍事性の構えを起こし均衡的な力の相関を果たす事が少なからず要る。しかしこの因果に偏った体質が作られる基調の世界観には長期的な生態の適正が見えづらい。物質性に支配される短変数の因果に対し精神や感性の健全性を求め物質性の適正な活用の発想を増す基本原理を基軸に高める施策が求められる。単純物理の強弱による自存性の強化と他存性の減少という発想で支配される事の無き人間の根源的な性質を望む態度を根源且つ根幹性に整え作り上げる哲学文化や思想形成と稼働という創造に柱が産まれる。物性の増進性と精神の増進性という両極性と基軸性の施策を包含し創造力の全容観が形成される。こうした体系において生態の健全と永続の世界観へと広がる。

哲学文化政策 (思想世界観の導出)		
創造力の包括性		
精神性の増進	基軸性の施策	物性的な増進
教育芸術性 映画、音楽、アニメ、 芸術性、	政治行政 資源エネルギー 建設国土、衣食住	科学技術性 産業経済性 軍事性

あまりに歪な性格と同化しないような体系観が無いと負の同一性を広げる不健全性に陥る。空間や生態を良好に牽引するに相応する精神性と世界観や思想が求められる。変わりづらい普遍の基準の導出性と共に現況の対面から評価や予測性に及んで妥当な方法の構成を図る基準と制御の主体性と領域観が形成される。人間や生態の根源性を問い根幹性に回り産出性へ至る。産出性には根源と根幹を反映した部分と全体の構図が産まれる。根源や根幹に対する確たる見解を問い基礎土台性の基準を求める精神性と態度を基軸に持って部分と全体の適正を引き出し投じる主体性が産み出される。個々の施策はどのような性格を有するか、個々の施策の性格を掴みつつ、政策の相対化を起こし各種性格と全体の構成を遂げるのに、

根源且つ根幹性という観点が必要になる。根源且つ根幹に対する変わりづらい確かな見解を掴みだす事によって生態の健全と永続を牽引する性格が産み出される。短期や中期性の因果や周期の観点と稼働性を進める対象と共に、長期的因果性を問い形に表し短期や中期の適正に反映させる根源的な力となって長期周期性の観点と世界観が導出される。ここに力が起こらぬと歪な中期や短期に外れ、生態の不健全性と破壊性の軌道が広げられる。各種施策の個性と個性の相乗に及ばせる根源且つ全体性の構図の盤石性を求め作る特定対象という性格が必要となる。この面が弱いと歪な部分性と全体観に及んで根源と根幹の歪性が深まり広がる。自己と同一の性格を求め偏狭的な部分性の高まりに陥らぬ根源性を起こし全体性を導出し部分と部分の相乗や補完性に及ばせる全体性の観念が要る。静的概念体系の適正と動的工程の適正を引き出し、静と動を含んだ動静の規則性を持って生態の健全と永続の世界観が稼働する。「静的分化と統合」と「動的分化と統合」の自存と他存の相関を作る事が求められる。短調な発想と均一性と量の増大と依存の基調が強まる事への歪性の質感が生じ、根源性や根幹性と全体性を問い起こす創造性が存続し、いつの時代にも変わらぬ基軸性を持って諸条件の対面と評価性と予測性を生み、妥当な方法を引き出す創造法則性の確立が要る。生態の健全と永続の思想体系が作られる。

3) 哲学文化の主要な観点

3-1 心身と観念の相関と習慣

「祖母が小学生の孫に行儀が悪い事に対し注意した。すると孫は婆さんにそんなことをいう権利がないと言いつ返したそうだ。」このような現象に観念と身体と精神の相関に見る適正や不適正の評価が起こり、健康や健全さという人間や生態の根源的な観点や志向が出現する。家庭というごく身近な血縁の集まりと秩序の形成が進む事に対し学校という公性の機関と秩序と普及を果たす存在との適正な相関を模索し作る個別特定の創造へ展開される。「権利教育や人権教育」等という科目から人間にあるべき権利の規定と伝達の様子が浮かぶ。一般性の概念を表し頭で覚える工程が産まれる。静的な知識や知見を吸収する事に対してそれを用いる動態面の想定と適正を問う観点が弱まると頭でっかちで身体性の弱い精神不良等という現象を招く。一般性の概念という観念的な側面と経過や現況や評価という個別身体性

の側面と精神性の現れる方法の工程等として概念と身体と精神の相関と適正を伺う事へ及ぶ。静的概念と動態性の回る活動法則を基礎土台概念に整え、あらゆる創造の基礎に組み込み特定の観点や現象の配置性を起こし健全な精神の稼働と制御に及ぶ主体性原理が形成される。「理念と現況と方法と検証と改善」の習慣性として、所謂 PDCA サイクルという概念と稼働に展開される。「保守や革新」等という抽象化された社会政治思想の形成や活用を進める上での根本的な基礎概念と働く。「歴史と理論」や「知育と体育と徳育」等という観点の導出と思慮に連なる。法規の形成も個々の法規に対し法規間の相関と体系の在り方が問題に取り上げられる。個々の言葉や概念の羅列分断的な創出に見る不健全性の認識に及ぶ。枝葉を多産し根源や根幹の弱まる部分と全体の体形に映る歪性が出現する。習慣や規則性の不健全性が言葉や概念の具象と抽象の不整合になって現れる。根本的な観点が萎み抽象理念が高まる頭と身体と精神の分断と精神不良への予防と回る。基礎の弱まる専門の弊害を想定し確かな基盤性の科目の充実を求める要因が浮かぶ。生態概念をベースに起こしその在り方の適正を問い作る哲学文化の観点と体系的な集約原理と稼働を求める創造に展開される。

3-2 生態の健全と永続

「あらゆる現象に生命が宿る」と言った根源的な感性を反映し生態概念をベースに法規の体系に連ね良好な概念と稼働に回る内外性に及び健全な表現者や創造者が形成される。生命観や生態観が土台性を生み、教育金融と政治行政と産業経済、社会性や自然観、生態系に現れる。

生態概念	根源性	生命観や生態観
	根幹性	精神と身体と観念の相関、 狭義の哲学文化と教育金融と政治行政と産業経済、
	産出性	特定性：社会性や自然観、全体性：生態系、
	習慣性質	精神と身体と観念の相関と習慣、

3-3 主要なキーワード

心身と観念の相関と習慣、
身体的健康、精神的健康、観念形成と活用に見る健康、
家庭と学校、個と集団、私と公、
静的概念と動態性、動静概念と規則性、主体性原理、
保守や革新、歴史と理論、知育と体育と徳育、
法律の形成と稼働、整合と体系と改善、
具象と抽象の整合、習慣の良質、あらゆる創造に生命が宿る、
生態概念と健全性と永続性、
哲学文化様式、国民性と人間性、特定性と普遍性、